

from Samoa

津波被災地を元気づける「ペットボトルツリー」

文=武田敦岐

(サモア・環境教育・H20年度派遣・長野)
Text by Atsuki Takeda

津波で壊滅的な被害を受けたサモアの村。そこでのクリスマスを盛り上げようと、
協力隊員や教え子らが製作した「ペットボトルツリー」をプレゼントしてライトアップを行った。

2009年9月29日、サモアの南約190キロを震源とするマグニチュード8.0の地震が発生した。この地震でサモア有数の観光地であるウポル島南東部のビーチを津波が襲い、死者140人余を出す大惨事となった。現在でも家を失い、高台に避難している人々が数百人いる。被災地は首都アピアから車で約90分のところ。地震の影響で交通網が遮断されているなか、自分には何かできることはないかと、赤十字の車に同乗し、被災地に向かった。そこでオーストラリアから来ていたレスキュー隊と知り合い、行方不明者の捜索の手伝いを4日間続けた。完全に破壊された車や家屋、津波で運ばれた砂や巨岩、なぎ倒された木々。被災地の中心での捜索は想像を絶し、被害の甚大さを改めて知った。

ゴミ問題も考えたツリーの製作

この津波はサモアでは過去にない規模の災害で、偶然にもこの国に派遣されている我々に何かできることはないかと皆が考えた。協力隊員とシニア海外ボランティア(SV)で協力し、被災地の学校の片づけを行ったりもした。直接的な支援はサモア政府が指揮をとって進めた。

津波直後に行方不明者を捜索した私は、そのとき見た悲惨な光景が頭を離れず、暗い雰囲気忘れさせてくれるような、被災者を元気づけるような支援ができないか考えていた。そこで、同じ環境教育隊員の尾上保子さん(H21年度派遣・神奈川)と相談し、被災地にペットボトル

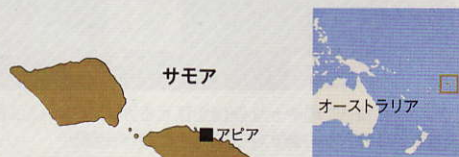
で作ったクリスマスツリーをプレゼントしようとした。プラスチックゴミが不法投棄されていることが皮肉にも津波で明らかになり、その投棄現場を見たことから、ゴミの正しい捨て方も教えようと考えた。だが、何よりも闇の中で輝く美しいツリーを見て、人々が元気になってほしかったからだ。

被害のなかった首都の小学校で活動している、小学校教諭隊員の楠原由樹子さん(H19年度派遣・香川)と小池瑞穂さん(H21年度派遣・埼玉)に事情を説明し、協力を依頼した。まずは教え子たちに被災地の状況を伝え、津波の危険性や大地震の後にはどのように行動したらいいかという防災の話もした。そのなかで、流されずに残ったプラスチックゴミも紹介し、衛生問題とからめながら、ゴミを散らかしてはいけない理由を説明した。また同時に3R^{*}を寸劇形式で実践し、ゴミ減量の環境教育も行ったのだった。その後、ツリーを製作して被災地にプレゼントすることを提案すると、被災地の復興を願っている子どもたちは積極的に協力してくれた。約80人の子どもの協力のもと、約450本のペットボトルを使った高さ2.5メートルのツリーが2本無事に完成した。

被災地の子どもたちから元気をもらって

そして迎えた09年12月16日のライトアップイベント当日。都合がついた隊員やSVが応援に駆けつけ、2本のツリーを被災地に移設した。

*...リデュース(Reduce:廃棄物の発生抑制)、リユース(Reuse:再使用)、リサイクル(Recycle:再生利用)。



1. ライトアップされた「ペットボトルツリー」の周りに集まるJICAボランティアと被災地の人々。ツリーを点灯した瞬間、子どもたちから歓声が上がった
2. 想像を絶する状況だった、津波後の行方不明者捜索現場
3. ツリー点灯式前に、被災地の子どもたちにペットボトルで風車を作って見せる武田さん

暗くなるまでの時間にペットボトルを使った風車の作り方などを紹介。ここではリサイクルについての質問も飛び出し、よい啓発活動となった。その後、屋外に設置したスクリーンを使って、3Rについての簡単な説明も行った。被災後で暮らしが大変だと思うが、子どもも大人も真剣に聞いてくれて、納得してくれたと感じる。

最後にみんなでカウントダウンしてツリーをライトアップ。輝くツリーを見た子どもたちの目が印象的だった。明るいクリスマスマスのムードを盛り上げることができたと感じた瞬間だった。

今回のクリスマスツリーをプレゼントするという企画は、被災地の人々を元気づけるために行ったもの。だが、そのお礼として、レバ村では子どもたちがダンスを披露してくれたり抱きついてきたりして、サモア流の温かい感情表現に、こちらのほうが元気をもらった気分だった。

被災から約3カ月が経ち、復興支援は中長期を見据えた計画の実施段階に入ってきている。今回は、レバ村とサティア村の人々に、楽しい時間を提供するだけでなく、今後の環境教育を視野に入れ、プラスチックゴミが長期間分解されずに残るということを説明して、なぜゴミを散らかしてはいけないかということの衛生問題とからめて伝えることもできた。

今後も被災地を訪れ、ゴミ問題に関してもう一步二歩進んだ環境教育を続けていきたいと思う。最後に「またくるよ」と言ったときに、子どもたちが「いつでも来てね」と言ってくれたことがうれしかった。